とある超能力者の日常生活

疾風の反英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある超能力者の日常生活

【Ｎコード】
Ｎ６７６３Ｕ

【作者名】
疾風の反英雄

【あらすじ】
力を隠し日々何事もなく過ごしていた青年は、一人の少女と出会う。
その出会いは青年にどんな変化をもたらすのか。超能力者と天使と神が交差するとき、運命は動き始めた。

キャラ設定（前書き）

前回書いた小説が無駄でなかったことの証のために、読者のみなさんよ。

私は帰ってきたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

お久しぶりです。疾風の反英雄と言います。前回も同じタイトルで小説を投稿しましたが、さまざまな事情と改めて自分で読んで恥ずかしい作品だなと思い投稿しなおすことにきめ今回キャラ設定を投稿することにしました。

キャラ設定

名前：霧島大地
性別：男
身長：１７２ｃｍ
体重：５８ｋｇ
誕生日：７月７日
好きなもの：文庫本、アップルパイ
嫌いなもの：他人が傷つくこと、他人を傷つけるもの

［＊　人物像　＊］

身長は平均的で平均的な体つきをしている。顔もそれなりで目は細く鋭い。

身体能力や学力、反射神経などは他人よりもかなり優れていて成績はトップクラスの天才。

普段はだるそうにしているがやる時はやる男で、ちゃんとメリハリをつけて生活している。困っていたり、助けを求めていたりしている人がいると自分の状況なども考えず手を差し伸べてしまうほどの極度のお人好し。ただし敵対する者や友達を傷つけるものなどには容赦がなく一切手加減しない。

能力名「創造神（クリエイター）」

想像したものを創造する能力。ただし一度使うと４時間は使えなくなり、創る物にもよるが能力を使ったことによって生まれた歪みは大地の体に激痛となって襲いかかってくる。最初に使ったときはその激痛に耐えきれずすぐに意識を手放してしまった。

現在はあまり使っておらず「創造神」によってつくった「火炎操（パイロキネシス）

作能力」、「念動力（テレキネシス）」、「雷操作能力（エレキクラッシュ）」を主に使用している。これらの能力は過去に大地の深層意識に存在する「深淵の闇（アビス）」によってつくられたもの。

奥義「幻想世界（イマジネーションワールド）」

もともとは「創造神」によって作り出されたもので対象の魂を己の世界へと連れ込む技。しかしこれを使っている際は本体の大地の意識もない状態なので無防備になってしまう危険な奥義。大地の世界に連れて行くため「創造神」を使っても歪みは生まれず、能力の乱用を可能とする。

風景は緑の広がる草原ですべてを包み込むような大空と眩しく輝く太陽が存在する。何物も受け入れるような光景に過去その世界にいったものは感動したという。

一度使うと１ヶ月ほど使えなくなるため乱発はできない技。

最終奥義「？？？」

本編ではまだ出てきていない最終決戦で出そうと思っている技。

本編をお楽しみに。

名前：月島ノア

性別：女

身長：１４８ｃｍ

体重：４５ｋｇ

誕生日：不明

好きなもの：優しい人

嫌いなもの：他人を傷つける人

［＊　人物像　＊］

髪の色は白銀で腰までの長さ。身長は小さいが雰囲気や存在感がとても神秘的でかわいいというよりきれいと思われることのほうが多い。

ただしいつもは無表情で何を考えているのかいまいち掴めない。でも実はとても心優しく他人の痛みや迷い、敵意などには敏感で孤児院の子供たちにとってはよき相談役となる。反対に行為に対しては鈍感であり、恋というものも知らないため自分の感情さえいまいち掴めないほどの鈍感さである。

能力名「断罪（ジャッジメント）」

雷を生み出し、操る力。

家族代わりであるゼウスから教えてもらい唯一使えるようになった絶対的な力であり、ノア自身も自信を持っている。天候もうまく組み合わせれば落雷程度なら軽く操ることができる。普段は自身の魔力から雷を生成、使っている。

名前：霧崎穂香
性別：女
身長：１６３ｃｍ
体重：５１ｋｇ
誕生日：１０月２５日
好きなもの：甘いもの全般、特に和菓子など
嫌いなもの：苦いもの全般、特にコーヒーなど

［＊　人物像　＊］

幼さの残る洞がんでいつも髪を後ろで縛ってポニーテールにしている幼馴染。

天然でのんびりしている。その性格からかあまり人を疑わずあっさり信じてしまうのが悪い癖。他人の世話をするのが好きだったりして孤児院の子供たちの面倒をよく見ているため、子供たちからの人気も高い。

スタイルは抜群にいいという訳ではないが、そこまで悪くない。しかし運動は苦手であり体育の成績は5段階でいつも2をとっている。クラスでも人気者で学級委員も務めている。

能力名「読心能力（マインドリーディング）」

他人の心や記憶などを読み取る力。

その人が忘れてしまったような奥底にある記憶などでも読み取ることが可能で、応用すればある程度の記憶喪失は治すことができる。

穂香の場合は特別力が強いせいなのか、物の記憶なども読み取ることが可能。そのせいかものを大事にしない人は大嫌い。

名前：虎田鉄雄
性別：男
身長：１８６ｃｍ
体重：７５ｋｇ
誕生日：７月１８日
好きなもの：筋トレ
嫌いなもの：女の涙

［＊　人物像　＊］

筋トレが好きで暇があればしているが筋骨隆々と言う訳でもなく、筋肉はその引き締まった体の下に隠れている。黒のショートヘアで、肌は浅黒い。　察しがよく他人の感情の変化などには敏感で空気が読める常識人。成績はそれほど悪くなくよくもない。運動神経は抜群にいい。

女性に泣かれるのを非常に嫌い、泣かれるとすぐに冷静さを失うのが短所。

能力名「念話（テレパシー）」

遠く離れた相手を想像することでパスをつなげ思うだけで会話をすることを可能にする能力。

相手との距離、場所などに左右されないため非常に便利。さらにパスをつなげた相手の位置を把握することも可能。パスをつなげる相手は拒否することができず、そのパスを利用して悪性の記憶などを送り込むことも可能な地味に凶悪な能力。防ぐためには相応の能力でカバーしなければならず、一般人はほとんど防ぐことができない。

一度につなげられる相手は現在のところ5人が限界である。

キャラ設定（後書き）

今までお待たせして申し訳ないです。
今回は前回よりも割とスローペースになるとは思いますが、作品の質を時間をかけてあげていきたいのでご了承のほどをよろしくお願いします。
次回投稿できるのはいつになるかわかりませんが、今後ともとある超能力者の日常生活をお願いします。

とある超能力者の日常

これは一般人の目から隠れて日々を過ごす超能力者の物語である。
だが超能力者の少年は、一人の少女と出会い変わっていく。その変革が世界にどんな影響をするのか、誰も知る由はないだろう。

＊＊＊＊＊

「あーめんどくせぇ」
夏休みを目の前にしたある日少年は、照りつける太陽と肌に感じる湿気に嫌気を感じながらＳＨＲを受けていた。クラスを見回してみると全員が同じことを思っているようで暑そうにしている。
ふと一人の女子と目が合った。その瞬間に心の中で一言バーカ、悪態をつく。もちろん顔には出さずに、だ。だがその女子はその悪態が聞こえているか（・・・・・・）のように眉間にしわを寄せてこちらに向けて舌を見せる。俗に言うあかんべぇだ。
こんなことは日常茶飯事なので特に気にせず流した。そんなことをして過ごしているとＳＨＲが終わりを告げる。帰ろうと鞄を持ち立ち上がると先ほどの女子がかばんを持ってこちらに向かってくる。その様子を気にすることなく青年は歩き始めた。そのあとにつくように歩く女子は明るい声で青年に向かって声をかける。
「ね、大地。一緒に帰ろうよ」
その言葉を予想していたように大地、と呼ばれた青年はため息を

つくといつもどおりに答えを返す。
「いつも言っているだろう、ついて来たければ勝手にしろ。おれは特にお前を強制する気はないとな」
「そう言わないでよ。たまには一緒に帰ってもいいぜ、ぐらいはいってほしいのに」
「まあそういうなよ、穂香。一緒に帰ってやるから」
穂香が不機嫌そうな雰囲気を放つと大地は即座にフォローする。それで幾分か気分を良くしたのか穂香はしかめていた顔を無表情にまで戻した。
「じゃあまあ、帰ろうぜ」
大地がそう促し二人揃って歩き出した。

校門まで歩くと誰かを待っている人影を見つけた。その顔を見てみると見覚えのあるものだったので大地は声をかける。
「よう、鉄。誰かと待ち合わせか？」
「ああ。お前たちを待っていた」
「俺たちを？」
大地は約束していたかと考えてみたが身に覚えがなく、穂香のほうを見ても首を横に振っていて身に覚えはないようだ。勘違いを訂正するために鉄と呼ばれた青年、本名虎田鉄雄は話を進めていく。
「ああ。ちなみに約束はしていないから安心しろ。記憶にないのは当然だ」
「お前もか。だから人の考えを勝手に読むなっての」
「そういう顔をしているだけだよ、大ちゃん」
急に愛称で呼ばれた大地は驚いて呼んだ張本人を見る。そのあと周りを見回して誰もいないことを確認すると安堵のため息をついた。
「穂香、外では愛称では呼ぶなっていっただろ」
「でもさ、周りにだれもいないからいいかなって」
「いてもいなくても変わらん。気配で俺も周りに人がいるかいな

いかは分かるけどな、できるだけ外ではその名前で呼ばんでくれ」
大地が心底嫌そうにいうと、穂香は渋々分かったといった感じで頷いた。その様子にどこか不安を感じながらも話が脱線していることに気付いた大地は、軌道修正し鉄雄に話を促す。
「ああそうだった。俺のようだがな、特にはない。今日はたまたまバイトが休みだから一緒に帰ろうかなと思っただけだ」
今日は何の厄日だと感じながらも渋々頷いた大地は穂香、鉄雄と一緒に学校を後にするのだった。

＊＊＊＊＊

「ねえ大地、あの本屋によっていってもいいかな？」
住んでいる孤児院に向けて歩いていると、突然道沿いにある本屋を指さして穂香がいいだした。
「ああ？別に俺は構わねえよ。鉄は？」
「俺のほうも問題ないな。よっていこう」
大地と鉄雄が構わないというと穂香は駆け足で本屋へ向かっていく。大地は穂香に転ぶなよ、と声をかけながらゆっくりと本屋へと向かった。
それは二人が目を離した隙に起こった。二人は談笑していて気がつかなかったのだ。穂香が黒づくめの男たちに連れ去られていくのを二人は見ていなかった。依然として気付かないまま穂香は連れて行かれ、大地と鉄雄は話しつつ本屋へと入って行く。

誰一人として黒づくめの男たちが車で走り去っていくのを見ていたものはいなかった。

とある超能力者の日常（後書き）

とりあえず投稿しました。

感想や文章に対する意見などがありましたらお願いします。

誘拐（前書き）

久しぶりに投稿することが出来ました。
まあ割りとストックを貯められましたけど、これからも更新は遅いかもしれないです。

ではどうぞ

誘拐

本屋の中へと入った二人は穂香がいないことに気付いた。店内はそれほど広くはないため見回せば大体全貌が分かる。だから大体誰がいるのかは見回せば分かるのだ。

しかし二人が見回してみても周りには二人以外店員しかいなかった。店内を歩き回って探してみても一向に見つからない。ようやく穂香がいないことに気付いた二人は連絡をとるべく携帯を使って呼び出してみる。

しかし呼出し音が続くばかりで一向に電話に出る気配はない。十回目の呼出し音が鳴り終わったところで電話を切る。

「鉄」

「ああ。分かっている。もうすでに試みている」

「急げよ、なんかいやな予感がする」

大地は底知れぬ不安を感じていた。今までの状況から考えて穂香が一人でどこかに行くのは考えにくい。そこで大地はこれは誘拐なのではないかと考えた。

「繋がった。どうやら穂香は気絶しているようだ。場所は……ここから北西だな。速さから考えて車で移動しているのだろう」

「そうか。どんな組織かは分かるか？」

大地の問いに鉄雄は首を横に振った。

「とりあえず俺は穂香を追う」

「だがしかし今はまだ夕方だ。能力（ちから）を見られるのは控えろと院長から言われているのだぞ」

「大丈夫だ、路地裏に入ってから姿を消す。そこから瞬間移動で追えばいい」

「それならいいが、たとえ連れ去った相手とはいえ能力は見られるなよ」

大地は分かっている、と答えると即座に走り出す。路地裏に入る

と同時に体を透明化させていき、数秒で完全に姿を消した。ヒュン、と風が通り抜けるような音をたてて大地の気配が消えた。
それを確認した鉄雄は自分たちの親代わりである院長の元へと駆け出していった。

＊＊＊＊＊

鉄雄が地上を走っている頃、大地は空中で目標を捕捉していた。それっぽい車を見つけては透視をして、それを繰り返し五度目ぐらいに見つけた。見つけた後は見逃さないように何度も瞬間移動（テレポート）しながら後を追う。そうして追い始めてから十分ほどして車は目的地に到着したのか動きを止めた。
大地は気づかれないように気配を殺しながら、車の近くへと着地した。男たちは穂香を抱えて出てきて廃墟へとはいっていく。昔は立派な建物だったのであろうその建物は日本風のものではなく、ヨーロッパ風の洋館だった。
洋館に入っていく男たちのあとをつけていくと一つの部屋へと到着した。その部屋は廃墟というには整いすぎていて、装飾もそのままだった。その部屋にあるベッドに穂香を下ろすと同時に一人の少女が現れた。
男たちのリーダーのような男はその少女を見つけると、切羽詰まったような声で話しかける。
「なあ約束の女は連れてきてやった！だから早く金をくれよ！」
「その前に聞きたいのだけどそこにいる少年は誰？あなたたちの仲

間？」
「っ！？」
「は？」
　大地は声にこそ出さなかったものの内心では焦っていた。姿を消し、気配を殺し、気付くはずのない自分の存在にその少女が気付いたのだ。
　これ以上は隠れていられないと考えた大地は一度能力を解き、姿を現す。その姿を見た男たちは驚きに目を見開き、すぐ後その顔を怒りに染めた。その怒りをすべてぶつけてくる。
「誰だ貴様は！なぜここにいる！！」
「霧島大地。そこにいる霧崎穂香の同居人だ。何でここにいるかって？あんたたちがそいつを誘拐するから追ってきたんじゃないか」
「誰にも気づかれていないはずなのに、第一貴様一人でどうやってここまで、町はずれの洋館までやってきたというのだ！！」
「それは企業秘密ということで。さて悪いけどそいつは返してもらう。大事な仲間だからな」
「ふざけるな！おまえひとりで俺たち三人を倒そうとでもいうのか！」
「そのつもりだけど？」
　大地が当然のように言い放つと、リーダーらしき存在は声をあげて笑った。右手を懐に持っていき銃を取り出した。それを見て仲間の男たちも銃を取り出してこちらに向けてきた。
　大地はその様子を見ても不敵な表情を崩さない。それを男たちは恐怖で動けないと判断したのか、忠告してきた。
「はやく帰らないと痛い目見るぞ」
「やれるものならやってみろ」
「いい度胸だ、殺してやろう」

一瞬の静寂。

風で窓が揺れ音を立てたのを合図に静寂は終わった。三つの銃声が洋館に響く。しかし大地は銃弾を受けなかった。銃弾はただ立っていた大地をよけるように進み後ろの壁に撃ち込まれる。
男たちはその様子に動揺した。銃は確かに敵を狙って撃ったはずなのにその敵をよけるように進んだのだ。男たちは敵を前にして動揺してしまった。それが命取りだったのはいうまだもないだろう。
「終わりだな」
「なっ！？」
一瞬で目の前に現れた大地に男たちは驚愕し、とっさに銃を向けるが腹と後頭部にクリーンヒットをもらい意識を失った。
それを三回繰り返し、一分と経たずに男たちを沈黙させた。男たちが気絶したのを確認すると大地は少女へと殺気を移す。さっきの話を聞く限りこいつらは実行しただけで依頼したのはこの少女らしい。少女が動いても即座に反応できるように警戒を最高レベルまで引き上げながら穂香を縛っていたロープをほどいた。
「おい起きろ、穂香」
「ん……、え？　何で大地がいるの？」
「話は後だ、立てるな？」
「え？　うん」
穂香を立たせると少女から護るように自分が間に立つ。そして少女をにらみながら問う。
「お前は何者なんだ？　目的は？」
「……合格」
「は？」
突然少女が口にした合格宣言に大地は目を丸くした。しかしすぐに気を取り戻し再度質問を行う。
「合格って何のことだよ？」
「まずは自己紹介から。私は月島ノア。天使よ」
「……え？」
大地は再度目を丸くした。天使という突飛な発言に驚愕せざるを

得なかった。そんな大地に構わずノアと名乗った少女は話を続ける。
「私の目的はあなたの実力を測ること。そして協力してもらうこと」
「おいちょっと待てよ。協力っていったい何のことだ？それに実力を測るって一体……」
混乱している大地を余所に少女は構わずに話を進めていく。完全に少女のペースに巻き込まれた大地は話に着いていけず困惑している。
「だから大地、私に協力してほしい」

神と天使

「協力だって？」
大地は誘拐の依頼を出したノアが自分に協力しろというのを理解できなかった。そんな身勝手な考えにいら立ちを覚えてさえいた。
「何で俺が誘拐の依頼をしたお前の協力なんぞしなきゃいけないんだよ」
「私たちには時間がないの。だからお願い」
「私たちってことはお前以外にも仲間がいるのか？」
「呼んだかの？」
「っ！？」
急に背後から掛けられた声に大地は驚愕とともに振り向いた。そこに立っていたのは白いローブのような服を着た長いひげの爺さんだった。気配なく自分の背後に現れたその人物に警戒するが相手には特に敵対心がないようなので一度警戒レベルを下げることにした。
「あんたは誰だ？」
「わしかの？」
「ああ、あんただよ」
ふむ、と老人はうなずくと自己紹介を始めた。
「わしの名前はゼウス。この世界を管理する神じゃ。それでそっちにいる少女はノア、わしの部下にして高レベルの天使じゃ」
「神と、天使？おいおいじーさんいくらなんでもそれは……」
「信じられんのもわかるが信じろ。わしは正真正銘の神じゃからな。ノア、翼を見せてやるといい」
ノアはこくりと小さく一度頷くと背中にある一対の白い翼を羽ばたかせた。その羽ばたきで舞った羽が空中に留まる。その光景に唖然とするの大地と穂香だ。驚きを隠せずに口を開けたまま止まっている。
「信じてもらえたかの？」

「……ああ。さすがに信じざるを得ないだろうな。幻覚の類ではなさそうだし」
「信じてもらえて何よりじゃ。ではノア、説明をしてやれ」
ゼウスの言葉にうなずいたノアは大地たちに向きなおり、説明を再開する。要は地上に落ちた天上界の宝石『セブンズシード』を集めるのを手伝ってほしいというものらしい。
「もし手伝ってもらえるなら願いを一つだけ叶えるぞ？」
「……分かった。手伝おう。それにこんな女の子だけで集めるってのを聞いたら放っておけないじゃんかよ」
「ありがとう」
「うむ、ではノア。あとは任せるぞ」
「はい」
ノアにそう告げるとゼウスは音もなく立ち去っていった。瞬間移動とは違うその移動方法に大地が少し興味を示していたのは余談だ。
「じゃあとりあえず帰ろうぜ。鉄も心配してるだろうし」
「そうだね、いろいろあって鉄ちゃんに連絡とれなかったしね」
そういって大地は穂香の手を握る。そしてノアのほうにも手を差し出した。いまいち状況を掴めないノアは首をかしげた。
「他のやつといっしょに瞬間移動をするときは体の一部に触れる必要があるんだよ。別空間のときに離れてしまわないように手を握るようにしてるんだよ」
「なるほど」
ノアは納得して大地の手を握った。大地よりも一回り小さいその手に大地が内心焦っていたのは言うまでもない。小声で呟いてすらいた。
「小さくてやわらかくて気持ちいいものだな」
「なに？」
「っ！？　なんでもない」
顔を覗き込んできたノアに狼狽する者の表情には出さずにやり過ごした。二人の手を握っていることを確認すると大地は能力を使用

してその場を後にするのだった。

＊＊＊＊＊

「遅いな、あいつら」
夜はすっかり更けて夏といえどあたりは真っ暗だった。時刻は十二時を過ぎたところである。いまだに帰ってこない大地たちに何かあったのではないかと心配で鉄雄はうろちょろしていた。
「いくらなんでも遅すぎるだろう。何かあってからでは遅い、能力を使うか」
鉄雄の能力は通信（トランス）能力で、相手を思い浮かべるだけでテレパシーを行うことができるというものだ。少し応用すれば相手の位置情報などもつかむことができる。
「なぜ繋がらないんだ！」
「だってテレポートで移動中だったし」
「うおっ！」
突然横合いからかかった声に鉄雄は驚いて後方へ飛び退いた。そこにいたのは両側に女の子を連れた大地だった。
「ただいま、鉄」
「ただいま、鉄ちゃん」
「全く遅いではないか、大地」
「いろいろ事情が込み合っててな」
ははっ、と三人で笑いあうと鉄雄は大地の連れてきたもう一人の少女へと顔を向けた。月夜に映える白い髪、まるで雪のように白い

肌。その感情を移さない蒼の瞳は月の光が反射して光り輝いているように見える。
「ところでそちらのお嬢さんは誰だ？」
「月島ノア、天使だ」
「は？」
「そういえばノアはどこで寝るんだ？」
「どこでもいい」
なら穂香の部屋だけはやめておけ、と大地は忠告する。
「なぜ？」
「こいつは無類の可愛いもの好きでなお前のことを可愛いと感じてしまったようなんだ。一緒の部屋で寝ると襲われるぞ」
「ひどいな、襲わないよ～」
「お前がカワイイものを見続けて理性を保っていたためしがないからな」
「うっ」
大地の指摘に思うところがあるらしく穂香は顔をゆがめた。ノアはそんな光景を感情の読めない表情で見続けている。そうしたところで大地はもう一度聞いた。
「で、だ。ノアはどこに寝るんだ？」
「……大地の部屋でいい」
「……ん。分かった、じゃあ俺のベッドを使うといい」
大地のことを信頼しているのか穂香と鉄雄はノアが大地の部屋に泊まることに反対しなかった。ノアも特に異論がないようで頷いた。
「オッケー。じゃあみんな寝ようぜ。いい加減眠い」
みんなが承諾する中鉄雄はそういえば、と話しだす。
「大地、明日の朝院長が部屋に来いってさ」
「マジで？　だるっ！」
大地はだるそうにしながら部屋へと戻っていく。部屋に入るとノアにベッドで寝るように言い自身はソファに寝転んだ。ノアも文句も言わずベッドで眠りについた。

大地はソファに寝転びながら今日会ったことを振り返っていた。
穂香がさらわれて、神と天使が現れて、協力を依頼されて天使と一緒に帰ってきて。
異常に濃い一日だったな、と深いため息を吐くと意識を闇へとおとしていった。

大地が目覚めたのは日が昇り始めてすぐのことだった。床に布団を敷いて眠っていた大地は上ってきた太陽の光を直接受け、暑さのあまり目を覚ました。

時刻は五時三十分。

普段の大地からは考えもつかないような時間の起床だった。それもこれもベッドを陣取っている天使のせいだ、と悪態をついてそちらを見ると姿が見えなかった。ノアの姿形はない。

「嘘だろ…！？　あれが夢だったってのか」

「どうしたの？」

「ん？」

反射的に声のした方向、つまり右側へと顔を向けると目を擦りながら体を起こしているノアが視界に入った。予想外の状況に脳は軽く錯乱状態である。

「えーと、なんであなたが俺の布団の中にいるのでしょうか？」

無意識に敬語になってしまったがしょうがないだろう。内心はもっとパニックなのである。

ノアは首をかしげるとさも当然とばかりに答えを返した。

「夜に一度目が覚めてしまって寝ぼけてあなたの布団に入ったみたい」

「オーケーオーケー。つまり俺には一切責任がないわけだな。ふう、良かった」

（危ないな、まったく。無防備にもほどがあるだろ。おれも男なんだ襲わない保証はないのにまったく無防備な美少女ってのは本当に厄介だぜ。みんな穂香みたいに気楽そうなやつばかりならいいのに……。そうすりゃこんなに朝から心臓に悪いことに出会うこともないし我慢する必要もない……わけないだろ！！

オーケー、落ち着こうか俺。あわてるな、隣にいるのはいつの間

になったのか分からないけどパジャマ姿のノア……可愛いな。ってそうじゃない！！
オーケー、落ち着こうか俺。ってさっきもやったなこのくだり。いい加減事実を認めようか。）
やはり大地の頭は軽い錯乱状態に陥っているのであった。

「朝から死ぬかと思った、いろんな意味で」
「大丈夫？」
「ああ、問題ないよ。気にするな」
原因はお前なんだけどな、と言おうとも考えるが必死に飲み込んだ。どうせ理解されることもないだろうという推察からだった。
「よし着いた。……院長先生、入ります」
「ああ、入りたまえ」
中世的な声が返ってきたことを確認すると大地はその扉を開き、部屋に入った。中には立派な椅子に腰かけている中世的な顔立ちの美青年。しかし本当は今年で齢６０を超えるおばあさんなのだが。
「おはようございます、院長」
「ああ、おはよう。今失礼なことを考えなかったか？」
「いえ、特に何も」
無駄に鋭い院長の指摘を軽くいなし呼び出しの理由を聞くべく話を促した。
「それで今回は何の御用ですか？」
「ああ、その前にそこの子の紹介をしてもらえるか？」
「そうでしたね。こいつはノア。おそらく本物の天使です」
「天使か…。よろしくノアさん」
「こちらこそよろしく」
軽く二人は挨拶をかわし今度こそ本題に入った。大地自身昨夜から一体何がどうなっているのかいまいち分からないほどに色々な事

が起こっているのでここで整理するのは好都合でもあった。
大地とノア、説明中……。
「というわけなんです、院長」
「なるほどな。要はセブンズシードという至宝を探すのを手伝えばいいということなんだな？」
「はい。そういうことになります」
「ふむ……、許可しよう。だがあまり子供たちは巻き込まないでくれよ？あいつらそういうことには喜んで突っ込んでいくからな」
「善処します」
「そろそろ朝食の時間だな。今日も頼むぞ」
「了解です」
院長の言葉に肯定の意を返すと大地は院長室を後にした。

朝ごはんの準備をするためにキッチンを目指すと、すでに料理は仕上がっていた。人数分のトースト、目玉焼き、牛乳、ベーコン。
今朝はパンらしい。作ったであろう奴がキッチンの方から出てきた。

虎田鉄雄。
結局のところ料理もできるのがこいつのいいところ。文学、運動ともによくできてクラスでも一目置かれている。その上料理もできるのだから申し分ない安定物件だろう。女子にとってはだが……。
「鉄が準備してくれたのか？　サンキュー」
「気にするな。院長の呼び出しではしょうがあるまい」
「まあな。当番は一応俺のはずだったんだがな」
一応感謝はしておく、と素直に鉄に感謝して挨拶をしていなかったことに気付いた。

「遅れたが、鉄おはよう」
「ああ、おはよう。大地とノアさん」
「おはよう。それと、ノアでいい」
「分かった。そう呼ばせてもらうよ、ノア」
俺の背後にいたノアとも挨拶をして……、そういえばいたな。すっかり忘れてたが、とか大地は心の中で思ってたりもするが、口に出してないのでノアには聞こえないのだった。
そうこうしているうちに孤児院のちびどもが目を覚まし始めたようだ。騒がしい朝になりそうだ、とか漠然と感じた大地だった。

孤児院（後書き）

だいぶ日が開いてしまってすみませんでした！

今回でストックを使い果たしてしまうのでどうなるかは分かりませんが、なるべく早く更新できるよう努力します。

これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6763u/

とある超能力者の日常生活

2011年10月7日23時43分発行